

[教育方法一般]

授業改善に向けて，効果的な指導法の一考察

－予習を取り入れた授業の展開－

永井 茂*

1 はじめに

「学力低下」問題に関わって，中央教育審議会では，予習についての重要性が述べられている（注1）。また，小学校の新学習指導要領総則では，「学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を計画的に取り入れるよう工夫すること」が新たに加えられ，見通しをもつ学習活動の1つとしても，予習があげられよう。

確かに，児童のアンケートの回答にも，予習に対して「予習をすれば，きっと頭はよくなると思う」という期待をもった回答がある。また，予習が学力向上につながることは，東京大学大学院教育学研究科の篠ヶ谷圭太氏が，『理解志向が高い学習者ほど予習すると授業理解が深まる』と書いている（注2）。やはり，予習する効果が認められていると言える。しかし，予習を取り入れた学習を展開している教師は，現実的に少ない。教師アンケートで，13人中1名しか予習を促していないという結果がある（図1）。また，児童のアンケートには「めんどくさい」「授業でやるから，しても無駄。」等の回答が圧倒的に多く，進んで取り組めるような学習法として捉えられていない（図2）。「予習はめんどくさい」といった固定概念が，教師や児童に対して浸透している状況がある。つまり，「めんどくさい」と「でも，やれば頭が良くなる」といった2つの矛盾した感情が交錯した状態では，やる気がでないのは理解できる。

そこで，「予習のよさ」が分かる授業を展開し，実感することができれば，児童が意欲的に学習することができると考える。そして，教師は，今までにない新しい予習法を探り，指導することで，児童の学習効果を生み出していきたい。

2 予習について

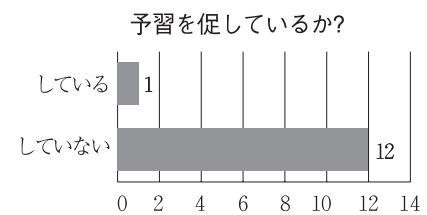
教師アンケートから，予習のメリットとデメリットについてまとめた。【表1：予習のメリットとデメリット】

メリット	デメリット
①シミュレーション効果がある。 ②問題意識をもち授業に臨める。 ③授業理解が深まる。	①学習時間の負担 ②難しいというイメージ ③学習理解の低い子には難しい学習 ④教師側の，驚きのない授業展開への危機

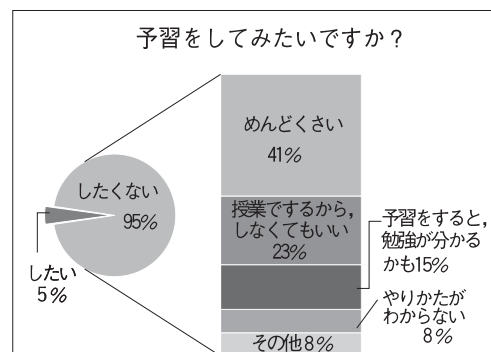
(1) 予習のメリット

① シミュレーション効果

学習を見通すことにより，学習の理解度が高まることが期待できる。そして，授業では，シミュレーションしてきたことを確認する思考が働くことで，より理解度が高まることが期待できる。



(図1：予習についての教師アンケート)
(調査：平成18年A小学校の担任13名)

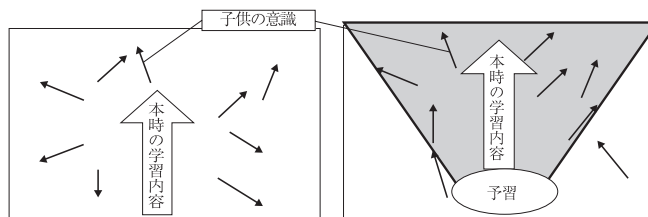


(図2：予習についての児童アンケート結果)
(調査：平成18年6年生38名)

* 長岡市立神田小学校

② 問題意識をもち授業に臨める

図3は、予習前後において児童の問題意識がどの方向に向いているかイメージした図である。予習をしない場合は、学習に望む段階では、児童の意識は、まちなちである（図3ーア）。一方、予習をした場合は、すでに児童は同じ方向性のある問題意識をもち得ていると考えられる（図3ーイ）。予習をすることで、授業に対して目標意識がほぼ同じ方向に向き、スムーズに学習に取り組めるようになることが期待できる。



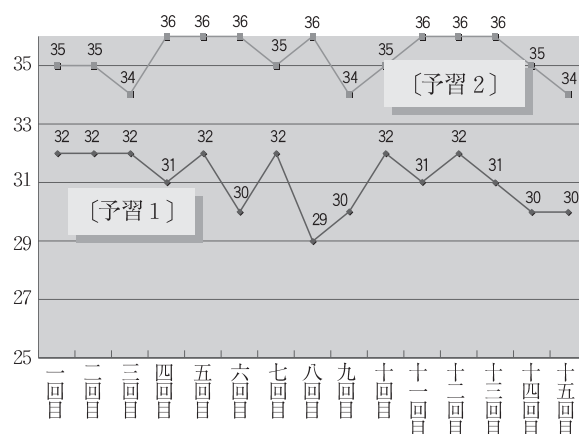
(ア：予習前の意識方向)

(イ：予習後の意識方向)

(図3：予習前後における児童の問題意識方向のイメージ)

(2) 予習のデメリットを解消する学習法について

デメリット①～④のように、予習には、かなり抵抗があるようだ。そこで、予習の継続性について4年生36名で2週間、調べてみた。やり方は、宿題と予習をすることを条件とした。すると、実施率は徐々に低下してくる。（図4：「予習1」）。児童の感想では、「復習よりも予習に負担がかかることが多い」とのこと。また、予習のやり方は、殆どの子は、「答えを導き出すまでする」「内容を理解するまでする」といった学習法である。これでは、一般的な予習は実施率が下がり、抵抗感があることが分かる。児童が、予習の経験が少ないために、どのように学習していいのを悩み、取り組みにくいものとして考えていることも伺える。



(図4：予習実施率の変化)

常葉学園大学で、非常勤講師の増山公彦氏が予習について次のように述べている（注3）。

～抜 粋～

1. 復習中心の学習にしよう
2. 予習は無理をしない

学習内容にざっと目を通して、「今、わかること」「今、わからないこと」を区別しておこう。わからないことは、授業のときに、集中して聞いて、それでもわからなければ、どんどん質問しよう。

『2. 予習は無理をしない』のように、学習効果を生み出すためにも、学習しやすいことが重要である。それが、継続的に行うことにもつながると期待できる。そこで、新しい予習法として、次のような「予習」にする。

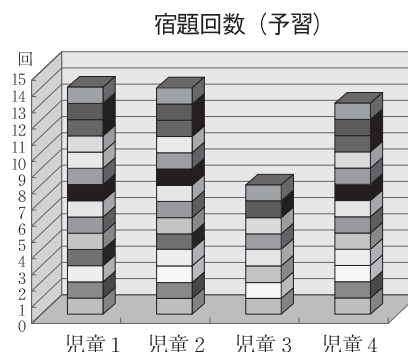
- ア 教科書を読み、分からないところに付箋を貼る。
- イ 分からないところを、ノートに書く。

まず、「予習」を、「付箋」を貼る作業中心として設定した。教科書を読み、分からなところ透明な付箋を貼る。分からないところがあれば、何枚でも貼る。この方法であれば、簡単であるし、継続的に行うこともできると考える。どの児童にも対応できる学習技術である。一方、復習は学習を中心とし、従来と変わらない学習方法とする。

改めて「予習」を実施してみた（図4：「予習2」）。簡単に短時間で行えるため復習とセットにしても学習することができた。グラフで示したとおり、全員が行うことができるほど、学級全員に受け入れられている。さらに、普段宿題をしない特定の4人に注目してみると、3人の児童が、この「予習」をしてきた。さらに継続していくと、4人ともこの「予習」をするようになった（図5）。児童には受け入れられ、「予習」のやりやすさが証明された。つまり、デメリット①から③が解消されたのである。

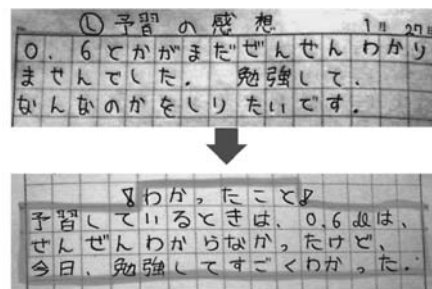
デメリット④については、殆どの教師が気にしていた。それを解消するために次の指導を行うことにした。

児童が「予習」をした後は、簡単だったところ、分からなかったところをノートに書き、次の学習に向けた自分の



(図5：特定児童の予習実施回数)

学習ポイントを確認させてみた（写真1）。すると、「0.6を知りたい」という記述がでてくるようになり問題意識をもったことが分かった。つまり、児童は、教科書を見て「今日は、こんなことをするのか」など、およその学習内容の見通しがつく。教科書の内容に沿う授業内容の場合は、児童がスムーズに学習を進めやすくなり、授業後の自己評価を書くときには、自分の付箋を貼ったポイントに注目し、予習と授業内容とを比較して書き、理解度チェックがしやすい。つまり、分かる・できるという実感をもち、自信につながった。明確な自己認識ができたのである。児童が「やっぱり」「なるほど」「なぜ」などの思いを授業中に作り出すことは重要である。特に、「なるほど」と思わせるためには、予習段階での児童の疑問点を授業の中で解決することがよい。つまり、教師は、事前に児童の疑問を把握する必要がある。そして、疑問点を解決する場면을授業の中心の1つに取り入れるのである。



（写真1：予習直後と授業後の記述）

一方、授業終了直前には、授業の分からなかったこと、分かったことをノートに記述している。予習の時と比較して書くことができています。比較することで、今日の学習理解ができていのかどうか実感できた様子も伺える。

デメリット④「教師側の、驚きのない授業展開への危惧」を解消するには、児童が「予習」を実施するだけでは無理である。教師も事前に児童の問題傾向を把握することが重要になってくる。

3 「予習」を取り入れた授業スタイル

児童が「予習」をして、学習が分かる喜びを味わってこそ、「予習」を取り入れる学習が進められると考えられる。教師側も一緒になって、「予習」を生かす授業をしていかなければならない。そこで、下記の授業スタイル「予習→本時→自己の振り返り」の確立を目指す。

「予習」効果を発揮するためには、児童が学習してくる「予習」だけで効果を目指すのではなく、教師が、児童の「予習」の状況把握に力を入れることが大切である。それが、より一層学習効果を生み出すと考える。

① 予習（授業前）

〈児童側〉 児童は、「予習」を行う。付箋があってもなくてもよい。「予習」後は、簡単だったところ、分からなかったところをノートに書き、次の学習にむけた自分の学習ポイントを確認させる。

〈教師側〉 教師は、「予習」を授業で生かすためにも、授業前に必ず、児童が貼った付箋の箇所を把握する。これは、授業の展開に大きく関わってくる。誰がどこに付箋を貼ったかを知ることで、授業中に特定の児童と価値のある質問や指示・支援・指導が可能になる。付箋がない児童は、内容を理解したことと考えられる。このように考えると、児童の付箋が、授業を変えていくと言える。すなわち、児童の「学習」が教師の「授業」と一体化されるのである。

② 本時（学習中）

「予習」をして、教科書の内容を確認し、自分の学習ポイントが決まる。「ここが分からない」や「今回は簡単」などといった思いができて上がる。授業展開は、その思いに対応するものとなる。だから、展開は基本的に教科書通りに行く。授業後は、確認をしっかりしなければならないことには変わりはない。

③ 自己の振り返り（自己評価）

授業の初めに、自分の「予習」してきた内容を確認し、学習後に、付箋してある場所の理解ができたかどうか自己評価する。分かった付箋には、自分なりの印を付ける。分からない場合は、友達や担任に聞くこととする。

また、授業終了直前に、ノートに書く活動をする。内容は、「予習」時の段階と比較して、本時中の学習で分かったこと（授業のポイントや、考え方、操作を振り返る等）を書く。この自己を振り返る活動を継続することで、自分の学び方を学ぶことができる。

この活動を通して、学習が分かる喜びを継続的に味わわせていくことで、意欲的に学習する児童を育成させたい。

4 指導の実践と考察

(1) 予習の効果

① 「予習」を生かす教師のあり方 1

実施した児童には、初めの段階で、「予習」のガイダンスを行い、やり方を教えた。6年生38名、算数「体積」で、

この授業を行った。

教師としては、授業中に、分からなかったところを確認することはとても重要である。実際に、児童が、教科書のどの問題に疑問を抱いているかが分かるので、授業中はよりの確に内容把握を確認できるのである（表2：①）。もちろん、机間指導の時も有効に機能した。一方、付箋がない児童にも、発表の機会を与え活躍させることができた。（表2：②）

（表2：児童の問題傾向を把握した教師の授業展開）

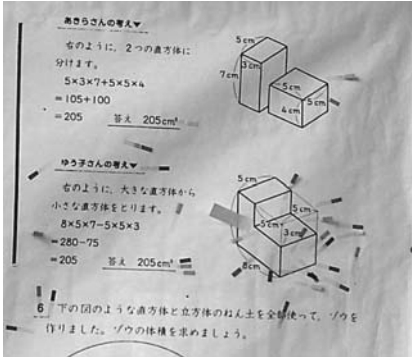
①（付箋があった児童への確認）	②（付箋がなかった児童への活躍の場面）
T：この問題は、ほとんどみんなが解けなかった問題だけど、解けるようになった人は起立してください。 C：はい！（2人残して、その他は起立する。） T：2人は、どこがわからなかったのかな？ ※この後、座っていた児童に教える	T：この問題が解ける人はいませんか。〇〇さん、この解き方を説明してください。 C：まず、大きな直方体の体積を求めてから、この部分の小さな直方体の体積を引くと、答えが出ます。

このように、教師が児童の「予習」における問題把握をすることは、授業の活性化には不可欠である。

② 「予習」を生かす教師のあり方 2

児童一人一人の「予習」における問題傾向を把握するのは、意外に時間がかかる場合が多い。そのため、事前に児童たちの状況を把握せずに、授業を始めてしまうこともある。その時は、児童との意思疎通を図れた授業展開がなされないために、ノート記述には「分からないことがまだあるので、復習に力を入れたい。」などのコメントが多くなる。

そこで、問題傾向を素早くつかめる工夫として、教科書の拡大コピーをした用紙を黒板に貼り、そこに、「予習」でした付箋を付けてもらう（写真2）。時には、「予習タイム」として時間をとる。そうすることで、児童のおよその問題傾向を時間をかけずに把握し授業に望めるようになった。また、「同じ場所に付箋を貼ったね。」「あの場所は分かるよ」など、児童同士が共通の問題意識をもつことができた。そのため、児童全員が問題傾向を把握できるので、より明確な着眼点をもって授業を受けられるようになった。「どこが分からないが分かる」を視覚化したことで、授業の見通しがより明確なものにすることができた。



（写真2：教科書拡大コピーへの付箋）

③ 学習量の視覚化

6年生の児童は、教科書を読んで、付箋を貼る。たったこれだけの作業が、宿題として認められる。と考えた児童たちは進んで予習を行った。冒頭のグラフの通りである（図4）。

さらに、継続して行った結果、教科書には、たくさんの付箋が貼られ（写真3）、学習してきた成果が一目で分かる。算数を苦手にしている児童は、たくさん貼ってくる。学習理解の良い児童は、貼る枚数は少ない。中には、何も貼らないで1単元を終わった児童もいる。両者とも、児童には、やったぞという自信が生まれていた。



（写真3：付箋の貼られた教科書）

また、4年生でも同様に実施し、児童にアンケートを採った（表3）。いずれの質問も、全員良い結果として受け止めている。一人一人が学習に手応えを感じたことがこの数字に表れていると考える。

（表3：4年生と6年生へのアンケート）

質問項目	4年生	6年生
質問1：予習でわからなかったことが、授業中にわかることがあった人。	36	36
質問2：予習をしたいと思う人	36	38
質問3：続けられそうな人	36	38

質問1で、6年生2人が、違う答え方をした。理由は、「予習前でも理解していたから。」と答えていた。これは、授業の学習スタイルが習慣付いてきたからと受け止められた。

(2) 「予習」効果をさらに高める

① ギャップを作り出す（教科書内容と変える授業）

児童が分かる授業を目指したい。だからこそ、教科書の通りに進めることが望ましい。ただし、児童の「分かった」という感動を生み出すために、教科書通りに進めない方法をとる場合もある。

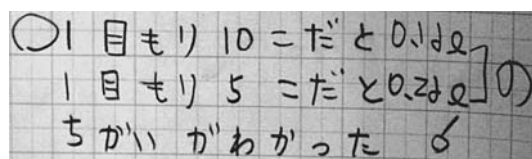
教科書通りにしない提示方法をとることで、児童が「おや？」と意識のズレを抱く。「分かっていたのに、分からなくなった」「分からなかったのが、分かった」「やっぱりよく分かった」「よけい分からなくなった」等様々な反応が起こり、自分が変わったことを経験することができる。それは、次のように整理される。

- ア 新しい概念に気づくこと
- イ 誤った概念に気づくこと
- ウ あやふやな概念が明確になること
- エ より概念の理解が確かなものになること

などである。そして、この感覚を味わい、立ち止まって考えることで、理解をいっそう深めることができる。

「おや？」という意識のズレを生むことにより、児童には考えようとする力が働く。発展的な学習内容の場合は、効果的である。そこで、6年生の算数「単位量」で実施した。

「予習」では、1目盛りいくつ分という意識がなかったので、授業では、1目盛りの量に的を絞った。そのため、自己評価の時にはより明確に表記する児童の様子が見られた。右図（写真4）のノート記述には、目盛りの読み方に注目していた様子が伺える。この学習は、目盛りの大切さを学んでもらうために行った学習内容の一つである。児童からも、新しい内容を学べるのでおもしろいと評価する反応も出てくるようになった。



（写真4：自己評価より）

② 児童と教師の連動効果

児童の問題意識を把握するために、教師は、授業前に一人一人の教科書に目を通す。そして、授業展開の補足を構想する。授業中には、教師と児童との意思の疎通を図れる場面が多くあった。つまり、授業中に分からないところを効率的に指導することができた。例えば、学習内容の確認場面では、次の2つのパターンをよく使った。

1つ目は、児童の問題意識が同じ傾向の場合に、学級全体で確認するパターンである。これは、授業中に、いつどの場面で、教師が指導すればよいかが見通してあるので、効果的な全体指導ができた。さらに、教科書と似ている例題をあげるなどして、集中して丁寧に教えることができた。

2つ目は、誰がどの問題に疑問を抱いているか分かる場合に、疑問に思っている児童を指名するパターンである。児童に合った指示が授業中に何回も繰り返すことができ、学習理解を確実にすることができた。そのため、自己評価では、「分かった」という表現が多く見られた。

このように、「予習」の状況を確認することで、授業の構成にも生かされた。児童だけが予習をしてきただけでは、このような授業を展開できない。教師と児童との互いに学習ポイントをつかむことで、分かりやすい授業を展開することができるからこそ、苦手意識をもった児童も、家庭学習に意欲的に取り組めるようになったと言える。

また、児童の自己評価の内容を受けて、教師は、次時への方針を立てることができるし、本時のねらいに対して児童がどのように受け取られたかみとれるなど、反省することにもつながった。

5 予習実施後の理解度の効果

「予習」を取り入れた算数の単元テストと「予習」を取り入れていない単元テストの結果をまとめてみた。右記(表3)の通り、「予習」をすると、ほとんどの児童が理解するようになったと言えよう。しかし、同単元での比較はできないために、明確に効果があるとは言い切れない。ただし、4年生時の面積は、全国平均以下であったが、2年間の継続指導をして、6年生の体積では、全国平均よりも上回る平均得点を確保した。学力テストで平均以下だった図形領域の得点が向上した様子が見られた。「知識・理解」の観点で効果があるといえる。

（表3：テスト結果）

〔予習あり〕		〔予習なし〕	
得点	のべ人数	得点	のべ人数
100	85	100	31
95	13	95	18
90	8	90	14
85	4	85	14
80	3	80	6
75	1	75	7
70以下	0	70以下	23

6 成果と課題

(1) 自主的な予習に向けて

小学校は、担任制である。だからこそ、児童と教師が連動する「予習」の効果は生みやすい。しかし、中学校はシステムが違うため、この方法での「予習」には無理がある。小学校だけで終わることが多いと予想される。

単に予習をすることを超えてその教科、その学習が好きになるまで子どもたちを育てたいと思う。中学校に向けて、「予習を続けたいか？」という質問には、ほぼ全員続けたいと回答している。このように、予習によって自ら学習をしようとする意識が高まっていることが伺える。「予習」と授業の連動で学習の楽しさを味わうことができた児童ならば、「予習」を家庭学習の一つとして取り入れようとするのが期待できる。つまり、家庭学習が充実する。このことは、小学校でも中学校でも大切にしたい共通の学習習慣であろう。

例えば、家庭学習カードを利用してみる。学習内容を選択し計画を立てたり、一日の家庭学習時間を記録するのはよく使われる手法である。そこに、学習内容によって得点化したり、より楽しさを味わえるようにビンゴ形式(図6)を取り入れたりすることで、家庭学習の充実が期待できる。つまり、家庭学習の習慣化を目指していけば、中学校に向けたステップアップになると考えられる。今後は、見通しをもち自主的に学習する児童の育成につなげるためにも、家庭学習の充実を図りたい。

予習ビンゴ コーナー			予習ビンゴ コーナー		
①しるしを書く (ノート 1ページ分)	②家にある 問題集をとく	③その他	④漢字しりとり (理科→ 科学→学校 →校舎…)	⑤言葉の意 味を辞書で 調べる	⑥時計の問 題
④読書と感 想文	⑤お家の人 からの問題 をとく	⑥学習の 続きを自分 で考えてす る	⑦時計の計 算学習	⑧予習 (教科:)	⑨計算ドリ ル (〇つけ と時間をは かる)
⑦お話 (ものがた り)を作る	⑧調べたこ とを新聞の ようにまと める	⑨学習日 記	⑩音読練習 (音読カード に書く)	⑪九九のふ くしゅう (時間をは かる)	⑫漢字ドリ ル(書き順 もしっかり と)

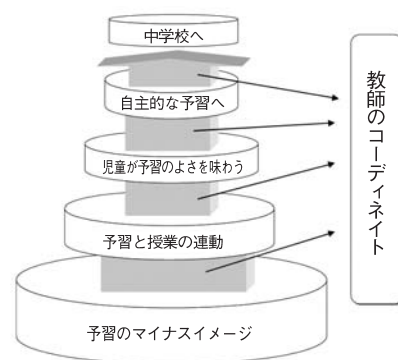
(図6：学習ビンゴのイメージ)

(2) 予習のイメージチェンジ

予習は「嫌だ・めんどうだ」というイメージを強くもつことは、冒頭で述べた通り。しかし、予習学習を通して期待できる力は、見通しをもった学習力を高めるとともに、自主的な学習ができる児童の育成につながるはずである。

だからこそ、予習のマイナスイメージを払拭できるよう、教師が様々な工夫をしなければならない。右図(図7)のように、教師が何段階ものコーディネイトをすることで、児童が「予習」を通して学んだ力は、次へのステップに生かせる考える。児童が「予習」の効果を味わえるように、教師が授業をコーディネイトしていきたいものである。

今後は、校内研修会などで、実践報告をして、「予習」のよさを伝え、教師の意識改革をする機会を作り出したい。



(図7：予習と教師のコーディネイト)

- (注1) 平成18年2月13日 中央教育審議会の初等中等教育分科会教育課程部会において、指導方法の改善の一つとして、次のように書かれている。「学習意欲や学習習慣を高めるため、家庭での学習課題(宿題や予習復習)を適切に課し、家庭と連携した学習習慣を確立することが必要である。」
- (注2) 東京大学大学院教育学研究科教育心理学コース大学院生 篠ヶ谷圭太氏の「予習が歴史の授業理解に及ぼす影響—学習観との交互作用の視点から—」論文である。市川伸一教授の研究生である。
- (注3) 学習のヒント集の効果的な学習法として提案している。常葉学園大学の他にも、地域密着型のインターナショナルスクウェアで英語を教えている。

参考文献

- ・市川伸一 「学ぶ意欲とスキルを育てる ～いま求められる学力向上策～」小学館 2006,
- ・高階玲治 「新しい学習メソッドの展開」教育開発研究所 2005,「自ら学ぶ『確かな学力形成』力」ぎょうせい, 2005
- ・文部科学省 「小学校学習指導要領解説 総則編」株式会社東洋館出版社 平成20年8月